

松山幸生先生講述

全32回--15

2022年10月

写者

小原靖夫

# ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

## 第15回 偉大な大祭司・神の子イエス①

### 更にまさった契約の仲介者

#### 第8章①節から⑬節 新しい、優れた約束の大祭司

- ①今述べていることの要点は、  
私たちにはこのような大祭司が与えられていて、  
天におられる大いなる方の玉座の右の座に着き、
- ②人間ではなく主がお建てになった聖所また真の幕屋で、  
仕えておられるということです。
- ③すべて大祭司は、供え物といけにえとを献げるために、任命されています。  
それで、この方も、何か献げる物を持っておられなければなりません。
- ④もし、地上におられるのだとすれば、  
律法に従って供え物を献げる祭司たちが現にいる以上、  
この方は決して祭司ではありえなかったでしょう。
- ⑤この祭司たちは、天にあるものの写しであり影であるものに仕えており、  
そのことは、モーセが幕屋を建てようとしたときに、お告げを受けたとおりです。  
神は、「見よ、山で示された型どおりに、すべてのものを作れ」と言われたのです。
- ⑥しかし、今、私たちの大祭司は、それよりはるかに優れた務めを得ておられます。  
更にまさった約束に基づいて制定された、  
更にまさった契約の仲介者になられたからです。
- ⑦もし、あの最初の契約が欠けたところのないものであったなら、  
第二の契約の余地はなかったでしょう。
- ⑧事実、神はイスラエルの人々を非難して次のように言われています。  
「『見よ、わたしがイスラエルの家、またユダの家と、新しい契約を結ぶ時が来る』と、  
主は言われる。
- ⑨『それは、わたしが彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、  
彼らと結んだ契約のようなものではない。  
彼らはわたしの契約に忠実でなかったので、わたしも彼らを顧みなかった』と、  
主は言われる
- 『それらの日の後、わたしが  
イスラエルの家と結ぶ契約はこれである』と主は言われる  
『すなわち、わたしの律法を彼らの思いに置き、彼らの心にそれを書きつけよう。』

わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

①彼らはそれぞれ自分の同胞に、それぞれ自分の兄弟に

『主を知れ』と言って教える必要はなくなる。

小さな者から大きな者に至るまで彼らはすべて、わたしを知るようになり、

②わたしは、彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い出しはしないからである。』」

③神は「新しいもの」と言われることによって、

最初の契約は古びてしまったと宣言されたのです。

年を経て古びたものは、間もなく消えうせます。

(第8章①節~⑬節)

「このヘブライ人への手紙が書かれた時代は、迫害のもとに置かれていた教会が、その迫害の中で大変強められ、団結力が与えられたという一時期を過ぎて、迫害が一応ゆるんで、さし当たって教会の外から、教会が被害を受けることが少なくなった時期なのです。同時に「教会の中には緩みきった一つの状況が生まれて来た」ということが、本日学ぶ箇所背景にあることを踏まえて、この学びを進めて行きます。

ですから、そんな中で教会は、神に向かって祈りを献げ、力を合わせて生きなくとも、何とかこの世の流れの中で、無事に過ごしてゆける状況が生まれて来たわけです。そういう状況に入りますと、人間というものは勝手なもので、神に従い神に頼るよりも、そのまま流されて生きて行くほうが楽だと考えるようになります。

信仰を保ち続けることは、私たちの人生の中ではある意味「大きな闘い」なのです。

というのも、この世そのものが神を認めようとしないう現実の中で、私たちは生きているわけですから、神の御言葉に従って生きることを願いますと、どう考えても、この世の周りに押し寄せて来る様々な問題と闘い続けなければならないのです。

もっと別な言い方をすれば、信仰を勝ち取って生きて行かねばならない緊張関係の中に立たされることになります。人間は緊張関係の中に立つことを、さほど喜ぶものではないのです。できれば緊張のないままで、自分が安全に過ごして行ければよいと思う。ところが、皆がそういう考え方生き方をしていると、緊張関係を保ち続けようとしている群れから離れて行く人々がだんだん増えてゆきます。当時の教会もそういう危機の中に置かれていたのです。

そんな状況の中に置かれている教会に対して、この手紙が書かれているということは前にもふれました。「そういう弛みきっている現実の危機から教会を本当に救っていく、あるいは、信仰を本当に建て直してゆくためには一体どうしたらいいのだろうか、」という問題が、現在の教会の中にも毎日の生活の中にも、しばしば起こって来る問題だろうと思います。

そんな問題提起に対して著者は「イエス・キリストを見上げなさい」と色々な形で語り続けています。あなたがたに「目を注がなければいけな」と言われているイエスはこうい

う御方ですよという紹介を一所懸命している。その言葉を聴きながら、私は次の箇所をもう一度読んでみたいと思うのです。

「私たちには、諸々の天を通過された、偉大な大祭司、神の子イエスが与えられている」と、これは既に4章の⑭節で語られている言葉です。

その偉大な大祭司イエスとはどういう御方なのかということ、大変長い箇所、長い部分を使って説明をしています。問題の箇所もその説明の一部に当たっているわけです。

私たちは30日にイースターを迎え、そして今や、復活節にあるわけですが、十字架の上で贖いの業を完成されたイエス・キリストは3日目におよみがえりになった。そして40日間弟子たちの前に顕現された後、天にあげられた。私たちは信仰告白の中でそのように告白し、そのように信じています。

ところが、ここで一つ私たちに向かって問いが発せられます。それは「天にあげられたイエスは、そこで何をしているのですか」ということです。そういう問いに対して私たちはしっかりとした答えをこの世に向かって発信しなければなりません。そうした使命に立つてこの手紙は、それに対する明解な答えを確信をもって告げています。「大祭司イエス論」で展開されている議論はそういう部分にまで及んでいるのです。<sup>98</sup>

第①節、②節、

①今述べていることの要点は、

私たちにはこのような大祭司が与えられていて、  
天におられる大いなる方の玉座の右の座に着き、

②人間ではなく主がお建てになった聖所また真の幕屋で、  
仕えておられるということです。

イエスは昇天されて玉座の右に位置せられ、そこで神が私たちのためになさるうとしておられる御業を、御自ら神に仕えられる形において成し続けられ、執り成しを為し続けていらっしゃるところでは述べているのです。

ここでちょっと脇道にそれるかもしれませんが、「天におられる」という言葉から、「天とは一体何だろう」ということが時には問題になります。ある人は「天とは私たちの上に広がっている大空のことではないよ」、と言うのですけれど、「それではそれはどこなんですか」と言われると、色々な意味で十分な説明ができない。

特に「諸々の天」などと書いてあると、これは何なのだろう、ある人々は「これは諸々の天体なのだ」と言うのですけれど、そういったものとは違うのです。（天体は地であり、天ではありません）

ここでは「天におられ」という「天」という言葉が「単数形」で書かれており、「諸々の天」という時の「天」は「複数形」で書かれている、「そういう意味では、『複数形で書かれている天と、単数形で書かれている天との違いは一体何なのか』ということの問題にしてみるのが大事なのだと思います」<sup>99</sup>

複数形で書かれている天というのは、この手紙の中では4章の⑭節に「諸々の天」と書かれているところ、あるいはこの前の7章の㊸節に「この方は諸々の天よりも高くされている大祭司こそ…」と書かれているところがあげられますが、それらは複数形で「様々な天、色々な天」と書かれている様相です。

別な言い方をすると「天」という言葉が表現している内容の中に「天使とか諸霊の宿るところ」というような意味を含め「沢山の天使や様々な霊が存在しているところを天と呼ぶ、」ということを考えて複数形で書かれているということが広く言われていますが、いやいや、そういうこととは全く別に、その「諸々の天を通り越した上にある神のおられる場所、神が顕在しておられる場所、それが真の天なのだ」と著者は言っているのです。ですから「ここで言う諸々の天」などというのは、「神に造られた天ではない」のです。

聖書の中には「天」という言葉が色々な形で出て来ます。神がお造りくださった天、被造物として与えられた天が出て来ます。それから、祈りの時の「天にいます父」という天、「天を仰ぎ見て祈る」というような天という言葉も出て来ます。

「モーセが天を仰いで祈った」とか「アブラハムが天を仰いで神の言葉を待った」というような言葉もありますが、そういう「天」というのは、神がいらっしゃる場所であることを、私たちは見抜く力を持っていませんし、その御方が存在していらっしゃる場所を知ることはありませんから、地に対して相対的に存在する神の被造物である天、私たちを超えた上にあるという「抽象的な天」そういうような形で使われている天であることが多いのです。

あるいは、神から一人一人に与えられる賜物を「天」から与えられたものという言い方をした場合の「天」は、「神が御臨在しておられる場所というよりも、神がそれらのものをご用意くださっているところ」からお送りくださったものという形で受け止めることが多いのです。

そういう色々な形で「天」を考えてゆきますと「イエスはそうした様々な天らしきところを通り越して、神御自身がお住まいになるところにまでおいでになった。それがイエスが昇られた天なのだ」というように見る事ができると思います。

そういう「天」について考えながら、ここでは「イエスは天にお昇りになり、そこにいらっしゃる大いなる御方、即ち、神のおいでになれる玉座の右の座にお就きになられました」と言っているわけです。

初代教会が神の権威を現そうとする時にいつも使った「玉座の右の座」という言葉をここではそのまま使っています。神の権威が臨む場所、神の御支配、神の圧倒的な力、それが神の玉座と言われているところにあると考えられていたわけですが、そのところにイエスはお昇りになって、お務めを担い果たしていらっしゃるのです。<sup>161</sup>

「イエスは今も生きて、人間の贖いの完成と一人一人の執り成しのために働き続けていらっしゃる」そのようにここでは、「イエスのお働きを定義しています」。私たちにとってイエスという御方は十字架に架かって死んで、おしまいになられた御方ではないことを教会では告白しています。イエスはおよみがえりになられた御方です。生ける命をもって臨んでくださる御方なのです。そして復活後40日間弟子たちにはっきりとそのお姿をお見せになり、天に昇られたのです。そして、その御方はまたお出でになります。

それで、「ではまたおいでになるまでの間、イエスはそこで何をしていたらっしゃるのですか」という問が生ずるわけです。ですが、「その中間の時こそが『今』なのです」。ですから、「今、この時」イエスは私たちにとってどういう御方ですか、ということが改めて問題になるわけです。

第③節、④節、

③すべて大祭司は、供え物といけにえとを献げるために、任命されています。

それで、この方も何か献げる物を持っておられなければなりません。

④もし、地上におられるのだとすれば、

律法に従って供え物を献げる祭司たちが現にいる以上、

この方は決して祭司ではありえなかったでしょう。

今この時、即ち天に帰られたイエスは、今、神とご一緒にいらっしゃって、人間の手によらない、天にある神御自身のもとに用意されている幕屋で執り成し続けていてくださる大祭司であられるのです。<sup>102</sup>

そのようにここで語っている理由は、実はイエスが執り成し続けていてくださるということがどうにも納得できない人間が沢山いたからです。特に「ユダヤ人たちは、「私たちにとっての大祭司は、あの律法で定められたレビ族の出身である大祭司なのだから、他の大祭司はいらない」と考えた。もっと別な言い方をすれば、私の生きている姿と同じように生きている人間こそが私の悩みや、痛みや、苦しみがわかるのであって、私を超越した御方が私の悩みや痛みや苦しみなどがわかるはずがない、という非常に安易な発想があったのだらうと思います。

ユダヤ人たちは「イエスはメシアでもない、大祭司でもない」と言い続けていました。ですから、「キリスト教は、ヤハウエを知らない(本当の神を知らない)「ローマ人にとって「ユダヤ教の一派であり、多少ユダヤ教の中から違った考えをもって飛び出しているグループ」と考えられていたのです。

そういう考え方に対してこの手紙の著者は「そうじゃないのだ」と訴えるのです。神がかつて約束なさり、私たちに雛形なる幕屋を見せてくださった。神のもとにあるものをこういうものだといってその横型図面を神は示してくださった。そして、あなたがたの中に、その図面通りのものを造って、天国の写しと遂して、「そこであなたがたは願い事をなし、祈りをなし、私に仕えることをしなさい」とモーセにお命じになったのだ。これは、

本来「神のもとに元がある」その模型はこんなものだよ」という写しを示されたのですと、次の節で語っているのです。<sup>103</sup>

#### 第⑤節

⑤この祭司たちは、天にあるものの写しであり影であるものに仕えており、そのことは、モーセが幕屋を建てようとしたときに、お告げを受けたとおりです。神は、「見よ、山で示された型どおりに、すべてのものを作れ」と言われたのです。

ところが、こういう考え方は元々ヘブライ思想の中には全くありません。ユダヤ人たちはそうは考えないのです。ところが著者は「聖書は始めから私たちに雛形を見せてくださって、その救いの雛形を幾度となくあなたがたに経験せしめておられるではありませんか」と言っているのです。

先ず第一に、神の救いの船は、人間だけに及ぶのではなく、すべての被造物のために開放されているということを明確にするために「ノアに命じて箱舟を造らせた」ではないか。あれは「神がその設計の寸法まできちんと教えたのであって、『神のもとにある救いの雛形なのだ』」だから、神は御自分のもとにある救いとはこういうものだと見せてくださるために箱舟を造らせたのです。「神が初めからご計画なされたものが、ちゃんとあるだ」と著者は言うのです。

そして、その御計画に従って、あのシナイの山ではモーセに対して律法を与え、今度は幕屋を造るようお命じになった。出エジプトの旅の中で神は、御自分のもとにある幕屋を造るように「山で示された型どおりに、すべてのものを作れ」と言われたのです。その大きさをきちんと指定してこのように造りなさいとおっしゃった、それは、あなたがたが神から遠く離れていたので、少しでも神に近づけさせようと神の愛から表れた一方的な恩恵による「契約」でありました。

#### 第⑥節、⑦節、

⑥しかし、今、私たちの大祭司は、それよりはるかに優れた務めを得ておられます。更にまさった約束に基づいて制定された、更にまさった契約の仲介者になられたからです。

⑦もし、あの最初の契約が欠けたところのないものであったなら、第二の契約の余地はなかったでしょう。

ここで「契約」という言葉が使われています。「古い契約、最初の契約とそれに優った第二の契約」という言い方をしていますが、ここで使われている「契約という言葉」は、ギリシャ語には二種類あります。

私たちが日常の生活の中で行う約束、例えば保険に入るための契約とか、結婚しましたという証しとして結ばれる契約と言うような契約は、実は「人間同士が対等な立場で互いに受け入れあう、認めあう、そして『その約束は真実であると信じ合うということによ

って結ばれるもの』なのです」。

ところが、そういう意味のギリシャ語はここで使われていません。むしろここで使われている「契約」という言葉は、私たちの生活習慣から言うならば「遺言状みたいなもの」です。それも一種の契約なのです。それは、遺言を書く人が、そこに存在している人との間で納得づくで書くのではなく、一方的に自分の思いによって「これをお前に与える」ということを約束する、そういう契約です。ですから、契約にあずかることのできた者は、自分がそのような契約にあずかる資格があるかどうかは全く問題になっていないことをよく承知して、受け止めることとなるのです。

「一方的な恵み、神御自身の御計画が神の愛によって私たち一人一人に具体的に実を結んでゆくように与えてくださった約束がここでいう『契約』です」。

ですから、契約を結んだ側が「もうこの契約ではとても駄目だ、」と思った時には一旦反古にして新しく書くことができます。遺言状の問題でも、何通も書かれた場合には一番日付が新しいものが有効です、古いものは駄目なのです。その遺言がどんなに立派であっても、この遺言に寄り頼みたいと思っても、最後に結ばれた遺言がそうでなかったならば、意味がなくなってしまうのです。

ですから「最初の契約、第二の契約と言った場合も、この著者の頭の中にはそういう思いがあるわけです」「神が第二の契約をお与えになったということは、前の契約ではとても救えないとお考えになったからなのだ」と言っているわけです。この「第二の契約」という事柄の意味を、やはり私たちはいつもしっかり頭に中に入れておかなければならないのです。

第⑧節から⑫節、

⑧事実、神はイスラエルの人々を非難して次のように言われています。

「『見よ、わたしがイスラエルの家、またユダの家と、新しい契約を結ぶ時が来る』と、主は言われる。

⑨『それは、わたしが彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようなものではない。

彼らはわたしの契約に忠実でなかったので、わたしも彼らを顧みなかった』と主は言われる

『それらの日の後、わたしが

イスラエルの家と結ぶ契約はこれである』と主は言われる

『すなわち、わたしの律法を彼らの思いに置き、彼らの心にそれを書きつけよう。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

⑩彼らはそれぞれ自分の同胞に、それぞれ自分の兄弟に

『主を知れ』と言って教える必要はなくなる。

小さな者から大きな者に至るまで、彼らはすべて、わたしを知るようになり、

⑫わたしは、彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い出しはしないからである』」

エレミヤ書の31章の③節から④節までの言葉をそっくりそのままざっと並べて書いていますが、書いておきながらこの著者は大変面白いことに、「エレミヤが神から言われてこう言いました」とは書いていません。各節の終わりごとにきちんと主を主語にして書いているのです。

第③節、

③神は「新しいもの」と言われることによって、最初の契約は古びてしまったと宣言されたのです。年を経て古びたものは、間もなく消えうせます。

神がそうおっしゃった以上、前のものは意味を失ってしまっているのです、ということは何度も何度も言っているのです。「私たちの救いは、私たちの神への応答によってなされる行為によって与えられるのではない、その方法では私たちは救いがたい存在なのだから全く新しいルートが開かれました。それは、イエス・キリストの贖いによる道です。そしてその道が開かれた以上、以前のルートは意味を失いました」そう言っているのです。

いとも熱い心で記されているこの手紙の中で聞き漏らしてはならない言葉の一つは、「完成されましたから、これは使わなくても良いものになりました」と言っていることです。主イエスが、神が結んでくださった古い約束に対しては、もうこれでよろしいという姿を具体的な形でお示しになったので、それにこだわる必要はなくなりました。もう済んでしまったことですから、それに対して、どうだこうだということは必要なくなりました。そのような大きな枠組みをもって、イエスの贖い主、祭司ということ語ればイエスは神の右の座で、雛形ではなく、幕屋の原型、神のもとにある幕屋におかれて、私たちと神とを結ぶためのお働きを今でもなさっていらっしゃるのです。

「幕屋」という言葉がここに出て来ますが、これは「スケーナー」という言葉が使われています、これは本来は「住む」という言葉の動詞です。そこに居住するという意味です。この幕屋というのは本来は神がそこにお住みになっていらっしゃる、臨在していらっしゃる所という意味で使われています。ですから幕屋は天幕で作ったから幕屋なのではなく、神がそこにお住みになっていらっしゃるところが幕屋なのだ。ソロモンは、「私は立派な神殿を造りましたが、あなたは当然こんなちっぽけなところにはお住みにならないでしょう」と祈った。なぜそう祈ったかと言うと「神の臨在の大きさを知っていたからで、すべてが神の臨在の中に含まれているのだと彼は考えたから」なのです。

ですから「幕屋というのは、私たちが作った天幕を張ったようなものだけということではなく、あれをはるかに超えているものだけでも、神はその巨大なものを私たちの前に小さな模型にして見せてくださった」ということを言っているのです。

「神の幕屋の前で、『イエスが執り成しをしてくださるその姿』を『祭司』というもの



の職務を通して私たちに見せてくださったのです。旧約聖書は私たちの贖いのために犠牲を献げられ、掟の箱に血を注いでいてくださったのです、だから『大祭司』は幕屋に入る時にはいつでも、『血』を用意して入って行ったのです。

しかし、新約の「イエス」は「そんな血を用意しなかった」

イエスもあなたがたが言っているような模型の幕屋で行動するのだったら、あるいは神が与えてくださる救いのイメージをそこで演出するならば、あの大祭司たちが大事に壺に入れて持ってゆくように、血を持って行かなければならなかったでしょう。

しかし「イエス」はそのような血をお持ちになっていなかったではないか。「祭司たちは繰り返し繰り返し贖罪の日の祭事を執行しない限り彼らの祭事は不完全であるから無効になってしまう、だから彼らは絶えず繰り返す必要があった」のだ。

一方、イエスは完全な御方であるから、「一回限り神の前に贖いの血を注げば、それは永遠に有効なのだ」と言っているのです。

「イエスの流されたあの十字架の血潮は一回限りで有効なのだ、期限なしに。神がお定めになって、これでおしまいとおっしゃる時までただ一回で有効なのだ。イエスは、その血を注がれた御事実を神の御前に絶えず携えられて、『それゆえ、彼らの魂を顧み給え』と執り成しをし続けてくださるのだ。神は私たちに目を注ぎ、支え、贖ってくださっているばかりではなく、私たちに対する熱愛をもって抱きかかえられ、何としても私たちを神のもとに救い上げてくださろうとしているのだ」ということをこの手紙の著者は一所懸命に訴えるのです。

主イエスが大祭司であられることは、裏返していえば「彼らの罪を赦してくださいとおっしゃった方」が、ずっと私たちを担い支えていてくださっている、私たちがその神の恵みからどんなに遠く離れていようとも、滅びの深い淵に潜り込もうとも、そのような状況から私たちを絶えず引き上げて立たせて、神が与える命の中に生かしてくださる、絶望と悲しみの淵に佇む時にも希望と光の中に招いてくださる。それを今も行なっていてくださっている、と言うこのなのです。

ゆえに「彼はメルキゼデクに等しい大祭司なるお方なのだ」と、そのようにこの手紙ではイエスを紹介をしています。私たち一人一人が日頃頭の中でキリスト教というものを知っているにもかかわらず、この著者がそのことを大変くどく丁寧に繰り返し語っている理由は、「頭でわかるのではなく、生きている現実がその中にあるのだということを確認できるようにとの願いと祈りをもってそのことを書きつづけているのだと思います。」

ここからは、「主イエスの大祭司としてのお仕事の紹介」をしていきます。

それは大きく分けて二つの特色があります。

一つは今日のこの箇所に出て来ます「超越性」です。111

「すべてのものを超えて、イエスは働いておられる、そして、その恵みはその中に臨むの

だ」ということなのです。それでは「超えなければいけないものは何なのか、」そのことを少し考えてみると「すべてのものを超えて」とはどういう意味をもっているのかが案外わかって来ると思います。

私たちはこの世に生き、この世の歴史の中に身を置いています。ですから先ず「時間的に制約」を受けます。時代であるとか、歴史であるとかです。

第二番目にはこの地上で生活をしていますから「面における制約を受けるといふことです」。民族であるとか、国境であるとか、あるいは自然であるとか、環境であるとかです。また神によって造られた存在としての枠組みを各々持っているわけで、知識であるとか、体験であるとか、そういった様々なものは皆違ってきます。

私たちは互いに共に生きましようと言っているのですが、殊更「共に生きよう」といわなければならぬ程、共に生きられない現実もあるのです。ですからそういうものを越えて生きるとは一体どういうことなのかを本当に真剣に考え、学んで行かないととんでもないことが起こりうるのです。

善意をもって行動すれば、それは悪いことにはならないだろうと思勝ちですが、この歴史的な現実の中に生きている限り、様々な壁があり、溝があり、対立抗争がある。不信や怨念を持ったり色々なことをしながら生きているわけです。「そういう様々なものの中で生きているという現実を、一緒に担ってゆきなさいとの神の命（命令）が、「地上の教会には与えられている」のです。<sup>112</sup>

「イエスが、それらの障壁を一つ一つ打ち砕いて、新しい神の国の生き方をイスラエルの人たちに三年間にわたってお示しになったように、そのような在り方を、現実の歴史の中で生きてゆくように『教会をお造りになった』はず」なのです。

ところが、人間が作り出すわざはイスラエルの人々の律法主義と全く同じになりがちで、そうした教会が歴史の中に多々ありますから、信条であるとか、伝統であるとか、制度であるとか、それによってお互いが縛られあい、また溝を越えられなくなり、悲しいことに、神の前に溝を埋めつくし、抗争を平和ならしめるために建てられたはずの教会が、溝を作り、壁を作り、抗争を繰り返す。そういう現実が私たちの中に具体的な形で存在しています。

では国境があるから神の救いはないのか、言語が違うから神の救いは及ばないのか、そうではないのです。障壁が「ある」という事実がそこに存在しながら、そのすべてが乗り越えられている、打ち砕かれている、意味を持たなくなっている、「それが神の御支配であり、シャロームなのです」。

キリストを妬む人がいた、嫉む人がいた、キリストに対する様々な壁を作ってキリストを締め出そうとする人がいた。そしてそのすべての力が結集してキリストを「死」というどうにもならない現実の中に追い込むという低次の事実があった」。

しかし、それは「イエスの愛」の前には何の力も持たなかった。

「だから、障壁が『あること』を問題にする必要はないのです」。それらは神の愛を変更させたり、突き崩したり、ないがしろにするような力は持っていないことを本当に信じて、神の愛がそこに生かされている事実を見出して生きて行こうとするならば、今日の歴史の中にだって神の恵みは具体的にありありと働いておられるのです。

私たちの目が、「遮るものに向けられ、それを貫く者に向けられていない」という現実には、大変寂しいことであり悲しいことだと思います。もし見えるものに幻惑される状況が続いていくなれば、救われたなど言っても早晚かつての自分に戻ってしまうでしょう。神の愛を受け入れたと言いながら、やはり律法主義に戻ってってしまうユダヤ人と同じように、かつての居心地の良かった生活の座に戻ってってしまうでしょう。

そういう危険をこの著者はひしひしと肌身に感じながら、そこから抜け出すように勧めているわけです。そのためには、あなたがたの力ではもうどうにもならないので、「大祭司イエスによってその罪を贖って頂き、その恵みにあずかる以外に道はないのだ」とここでは一所懸命訴えているのです。

「私たちがその壁の一つ一つを打ち破るのではなく」「キリストの愛が既にそれを乗り越えてくださっている」という、「神の恵みの超越性」を本気になって受け入れることこそ大事だと思います。<sup>114</sup>

つまり、イエスの祭司性は、そういう意味ではこうしたところに起こってくる「様々の障壁等の相対的な現実」を乗り越えて、むしろそれを「絶対的な神の現実」に変えられて行く力をもっておられる。それが「イエスが執り成してくださる」ということなのです。

聖書の例として、パウロの名による書簡、エフェソの信徒への手紙6章9節に、

「彼らにもあなたがたにも、同じ主人が天におられ、人を分け隔てなさないのです」という言葉があります。「人を分け隔てなさない」ということを別な表現をすれば「包括性」ということになります。すべてのものを超える力を持っていらっしゃるイエスが、「すべてのものを包み込んで贖ってくださっている」、ということを強調しているのです。

「すべてのものを包み込むためには、神は、どうしても私たちの歴史の中に深くかかわらざるを得なかった」。歴史を無視して、とび越えて天国に行けばいいのだと夢のようなこと言っていたのでは本当の救いは成就しない、だからイエスは肉の御姿をおとりになってこの乱れ切った腐敗し切った現実の中に一緒に暮らされ、そんな現実に関与して下さった。そしてそれを具体的に御自分の身に負い給うた。裏切られることも、あざけられることも、迫害されることも全部御自分の身に引き受けられた。そしてそんなものが、神の愛に対しては何ら影響を与えないことを、あの十字架の上でお示し下さった。どんなことが起こっても、神の愛は損なわれはしないことを、具体的に見せて下さった。そういうすべてのものを御自分が体験なさり、受け止めて下さった御方がイエスである。

そのようにすべてのものを担うのが大祭司としてのイエスの役割だった。「地上にいた祭司たちは罪人であるがゆえにそれを担えなくて失敗してしまった。だから最後に、神はもうその方法をお採りにならないで」独り子イエスをお立てになり、真の大祭司による贖いを完成してくださったのだ。そして、はや、いかなるものからも脅かされることのない生き方をする恵みをいただいていると著者は真剣に語っているのです。

私はこの語りかけの言葉を聞きながら二つのことを思います。

一つは、私たち自身の個人的経験の中で「自分の人生のことを考えてみたいと思う時、『自分の人生には諸々の限界がある』ということ自分で設定してしまう、『壁を作ってしまう』ことです。それはなぜなのか。私たちが『相対的な存在でしかない』と自認しているからです」。

その私たちが聖書の御言葉によれば何と「絶対的な存在だ」と言われているのです。どういう意味かということ、私たちは元々土の塵でしかないが、神の息を吹き込まれることによって生きたものになった。私が生きていることは、神の息を託されていることなのだ。だから私たちがその神の息に従って歩む限り「神の永遠を裡に抱いている、朽ちることのない存在なのだ」ということを、あの創世記の中ではっきり示しています。ですからそういう私たちの生き方は、本当にそのことを信じて生きるならば、それこそが「神の御前における基本的な人間の権利」なのです。

日本国憲法にも基本的人権という言葉が出て来ますが、そもそも基本的人権というものがよくわかっていないようです。基本的人権は何かということ、誰しものが侵せない、神によって与えられた、「かけがえのない価値」である。誰しものが奪い去れないものである。では、人間には元々絶大な価値があり値打ちがあるのかということそうではありません。相対的な意味から考えると土の塵でしかないわけで、無価値なのです。本来は無価値なものが神の御前で生きる権利が与えられ、神の命によって輝くものともなっている。

「ヘール・ボップ彗星」が話題になりました。

太陽の側に行くとその彗星は氷だからそれが溶けて、その溶けた力で長い尾を見せる。ですから、彗星が尾を引いているわけではないのです。太陽の熱が彗星に尾を引かせて輝きを見せているのです。「神の恵みが輝きを見せている」というそのことを忘れて、自分が光っていると思ったとたん、そこからずり落とされてしまうのです。

それと同じように互いの「基本的人権を認められなくなると、人はエゴイズムに走る」「私が」ということになるのです。それは国家や民族や、教会においてもそうです。基本的に神によってしか与えられない権利、神によって初めて保証されている恵みを忘れ去った時には何を主張し、何を訴えてもそれはエゴイズムでしかないわけです。自分のために、自分自身を見せるために、自分に都合よく成すためにものを言っているに過ぎなくなってしまうのです。

しかし、「大祭司である御方はそのような私たちをも包み込んでくださり、寸でのところでずり落とされてしまうような私たちをいつでも支え続け、神の御前に私たちを結び付ける糸によって絶えず結び付けていてくださっているのです」。それが「天にいらっしゃるイエスのお仕事である。」と書いています。それは再びおいでくださった時に、「あなたは神のものであり続けた」という保証をいただくためなのです。

私たちは今、毎日生活をしている中で、「神のものである」という保証をいただけるほど立派なことをし続けてはいません。ところが「イエスが私たちを神のものであらせ続けていてくださる」ことの結果、終わりの時、恐れることなく神の御前に立って主の名を呼び求める者として神から勝利を宣言されるのです。そういうために、イエスは今も必死になって執り成してくださっているのです。

私たちは「聖餐式」の時に「アナムネーシス」という言葉をよく使うのですけれども、「記念」という意味です。それはイエスが今も執り成しをしていてくださるということ、そのためにイエスは十字架の上で完全に贖いを完成させてくださったのだということを確認する意味において、イエスの裂いてくださったお体としてのパンを受け、流してくださった血潮としてのイエスの恵みをいただくために葡萄酒をお受けすることを意味しています。

パンや葡萄酒が特別の力を持っていて、イエスの肉体になったり、血になったりするわけではないのですが、イエスの十字架の貴い恵みをあのパンの一切れ、僅かな葡萄酒の中に思い起こす、そして主はそのように深い愛を今も注いでいてくださるという現実をそこに確認する、神の命が私たちの中に息づいていることを確認する、それが「聖餐という儀式」なのです。

ですから、「聖餐にあずかること」は、私たちのために今も執り成し続けていらっしゃる「イエスの愛に触れること」に他なりません。

言い換えれば、今も私たちの命を保証してくださっている恵みにあずかること、神は今もお見捨てになっていないということを確認することなのです。しかも、その確認は何度も何度も<更新>する必要があるのです。

「それは、イエスはもう一度血を注いだりはなさない。一度あの時に注がれた血潮の有効性を保証するために天の幕屋にあって今も執り成し続けていらっしゃる」そのことを私たちがしっかりと覚え続けるための<更新>なのです。

「イエスの御業自体は既にあのカルバリの丘の上で完成している」ということを、しっかりと弁えておかなければなりません。

この8章はそういう意味では、教会生活をしている、信仰を持っているという人々に、主が贖いになってくださったのだということを手短かに語っています。その言葉の一つ一つの

意味と、その言葉の重さと、今日的な意味と働きを非常にはっきりと示そうとして語ってくださっている言葉だと思うのです。いろいろな角度から見ることが出来ますが、今日はその辺のところを8章で語られている言葉として受け止めて頂きたいと思います。

(1997年4月12日)

写者あとがき

この松山幸生先生の大著を写させて頂くという無謀な私の思いつきに賛同してくださり、推敲のお役をご奉仕くださっておられた森容子先生のご主人が10月9日召天されました。毎月の推敲はお二人で読み合わせてくださいました。森先生が何度も読み上げられる、そばで真剣に聴いてくださり助言をされ、更に奥深い推敲が読まれる。静かな山間に響くお二人の愛の讃歌のようでありました。

その日、御教会でいつものように森牧師が礼拝説教され、ご主人は聴かれました。その後45km離れた山間の教会の設立式にご夫妻で出席され、日が谷間に沈みつつある帰路、

「帰りは僕が運転するよ」と言われました。小雨と薄暮の中で森牧師はためらわれ「お天気の良い日に、またお願いね」と返されますと「ああ、いい日だったなあ」とため息をつかれたとのこと。1時間くらい走ったところ、ご主人の実家近くにある飲料自販機で飲み物を買っているとき心不全で倒れられました。

森牧師は前夜式と葬儀式で全員が教会員でない親族を前にして説教をされました。感動に満ちた内容です。私はその原稿を私の宝物として側に置いております。

説教題は前夜式「天に至る唯一の道」、葬儀式は「朽ちるべきものが朽ちないものを着る」です。祭司としてのお勤めの厳しき、聖さを感じます。

そのような中にこの第15回が推敲されました。「のぼる道は、十字架に、ありともなど悲しむべき」（讃美歌320番1節）山間の牧師館でお一人でなさってくださいました。

森容子先生の秀徹した深読力で松山幸生先生のお言葉が再生され文面から躍動する命が湧き出るように様変わりしていきます。感謝でございます。(2022年10月30日)